

はやはり、肌の色の違い、黒人を奴隷とみなすアラブ人の差別意識に見出すことが出来る気がする)

内戦は大きく分けて、第一次内戦(1955-1972)、第二次内戦(1983-2005)という二つの時期に分けることが出来る。

第一次内戦は、スーダン政府と、南部の民族解放軍アニャニャとの間で平和協定が結ばれ、南部に自治権を付与するという形で終結し、地域紛争の自助的解決のモデルとして国際的に高い評価を受けた。が、内戦終結後に計画された様々な開発プロジェクトは中央政府の不十分な援助により遅々として進まず、南北の経済格差は広がるばかりで、わずか10年の後についに最近まで続いた第二次内戦へと突入することになってしまった。

この40年にもわたる内戦がスーダン、特に南部スーダンに与えた影響は計り知れない。100万を超える人々が難民あるいは国内避難民となり、南部各地に対人・対戦車地雷が埋め込まれ、道路などのインフラは徹底的に破壊された。つい最近、ADEOのドライバーが、スーダンでの新しいプロジェクトの下見の為に、ADEOのプログラスマネージャーを連れて、ここMoyoからスーダン南部のYambioまで片道まるまる二日がかりの旅をしてかえってきたのだが、スーダンの道は、とても道と呼べる代物ではないという。道はもちろんアスファルトで舗装などされておらず、土を踏み固めただけのものであるため、表面には鋭利な岩が顔を出すこともしばしば、道のど真ん中に大きな穴があいていたりするのは当たり前で、特に雨が降った後の道の状態は悲惨らしい。また、途中で道が途切れていて、林の中を四輪を駆使して分け入っていくこともごく当たり前であるという。ドライバーの、"The rule in Sudan is that you follow the route that somebody else has already passed, however rough it may be. Otherwise, there is no assurance that you don't bump into a land mine!" という言葉から、事態の異常さがうかがい知れる。

当初は南部スーダンの独立を強く望んでいた南部住民も、SPLAの分裂や長引く内戦による疲弊から、平和を強く望むようになり、国際社会の後押しもあって、今年1月ようやく停戦合意が結ばれることになった。これにより、南部スーダンの復興に向けた道のりは、やっとスタート地点にたつことができたといえる。

内戦が終結したことにより、難民たちは母国への帰還を求められることになるが、「自主的帰還」をするにあたっては次の二点が大きな壁となっている。

まず第一に、帰る場所を失っている多くの難民の存在である。国外に脱出したいわゆる条約難民は、自分がかつと住んでいたスーダンの土地に帰ることを求められるわけだが、往々にしてこれらの土地は、国内で難を

逃れて移動した国内避難民によって入植されていることがある。そこで、UNCHR やスーダン政府は、これらの国内避難民をまず自分たちのもいた場所へと移動させ、難民の帰る場所を確保する必要があるのだが、国内避難民たちは定住した場所からの移動をしづることもしばしばである。また、40年にもわたる内戦の中で両親を失い、自分の故郷を判別できない難民たちも存在する。

第二に、帰る場所があっても、インフラは徹底的に破壊され、学校も病院もないという状況である為に、UNHCR の庇護の下より快適にくらすことができる周辺諸国にとどまりたいという人々も多数存在しているという現状である。(友人のスーダン人曰く、"Of course I have a feeling of nostalgia towards my mother country Sudan, but if you look into the reality it is very difficult to decide to return. In my home town I hear everything is destroyed and as a matter of fact you can get very good education here in Uganda. When I think about my children's future, I am still wondering...")

これらの事情から、UNCHR や保護先の国家は難民の「自主的帰還」を5年から10年くらいのスパンで漸次的に完了させるプロセスと見ているようで、なるべくスムーズに帰還を実現できるように色々と苦慮している。

Moyoにおいては、「自主的帰還」にむけての第一歩として、今年6月、7月あたりに難民を対象にした Census が行われることになる。町で、Census のための調査員募集の公示を見かけたが(話はそれるが、こちらでは、それこそ日本のバイト感覚で国際機関における短期の職の募集が頻繁になされており、新聞には毎日のように募集広告がでている)、実際に Settlement をまわって、難民の各家庭の家族構成などの基本的な情報を更新することが目的らしい。ウガンダ政府側で難民を担当している OPM の事務官の話によると、この調査によって得られた難民の正確な情報を元に、UNCHR との調整を図り、母国スーダンへの帰還の手筈を整えていき、来年の頭には帰国組第一陣が旅たてるようにしたいということであった。

ホスト国側で帰還の準備が進められる一方で、難民を迎えるスーダン側でも環境整備のための準備が始まり、PKO が南部スーダンに派遣されると共に、各種 NGO があたらな活動を始めている。ADEO もそんな NGO の一つであり、4月末先遣隊として ADEO-Moyo のスタッフが、プロジェクト地、Moyo からスーダンの国境沿いに 400 キロほどのところにある Yambio に派遣されることになった。現在はまだ事務所が確保されていないため、WHO のオフィスに居候をしているという話だが、今年中には本格的にプロジェクトをはじめられるよう、UNHCR、UNICEF と交渉中とのことである。

人名あれこれ -----

人の名前は少し踏み込んでみると意外に telling である。

スペインではサパテロ・ロドリゲス・ルイス・ホセのように、普通四つもの名前をもっており、順に父親の苗字、母親の苗字、クリスチャンネーム、名前となっている。子供が出来ると、その子供は父親の第一姓、と母親の第一姓を継ぐため、結局母親の姓は劣性となってしまう、一代限りしか継がれないが、それでも問答無用で父親の姓のみを継ぐ社会と比べるとどこか女性を尊重しようとする意識のようなものが感じられる。

イギリスでは、名前のバリエーションは日本人と比べると驚くほど少なく男性なら Peter、Christopher、Philip、Charles、Michael の名前を挙げれば、人口の 1/3 はカバーできているのではないだろうか。Peter や Mary などメジャーな名前は大抵が Christianity や神話の登場人物に由来するのも特徴的である。が、一定の周期で、これらのステレオタイプから外れる名前が流行することもあるようで、例えば、Diana 妃がワイドショーをにぎわしていた時代は、Diana と名づけられた子供が増えたらしい。一般にその時代に人気のあった芸能人や施政者などの有名人の名前が流行する傾向にあるのは、日本や他の多くの国々でも共通の現象のようだ。

さて、それではここ Moyo 界限では名前はどのようにして付けられているのだろうか？これがまたなかなかおもしろい。

Moyo にすんでいるのは Madi 族や Lugbara 族であるが、彼らの大半はクリスチャンである。「まさにアフリカ！」という感じの名前に Michael や Stephen などのクリスチャンネームがまざっており、最初は随分違和感があった。名前の構成は、given name, christian name, 父親の given name となっており、普段は、最初の二つの名前のみを名乗るらしい。いわゆる苗字がないのが特徴的である（あるいは父親の given name を苗字とみなすのか）。given name は現地語の Madi や Lugbara でつけられる訳だが、これがなかなか興味深い。少し例を挙げてみると、

Eiyo→No home

Vusso→Farming

Opio→Twin

Abiriga→Hunger

Atiku→Not supposed to produce

Ayoku→I can't say anything

といった感じである。



Vusso は、父親がその地域で農業の先駆者だったためにつけられた名前らしくまだ理解できるが、「家なし」や「子供を生むな」などの名前は日本では到底考えられないものである。(記憶が正しければ、子供を悪魔と名づけようとして役所に却下された両親がいたような・・・)日本では子供の名前は、子供に期待する将来像や性格、音や漢字の響きなどに基いてつけられることが多いが、こちらでは、どうも家庭の置かれた状況やイベントの Reminder としてつけられることが多いらしい。これはここアフリカでは子供の数は富や権力の大きさと結びつくことが多く、男たちが競って子供を生む慣習があったこととも関係があるのかもしれない。

スタッフの一人である、Ayoku Alex に自分の名前の由来を聞いたところ彼が生まれるまで、その家庭には女の子しか生まれていなかったらしく、父親の財産を誰がづくのかと、親戚一同に後ろ指を指されていたらしい。そこで、彼が生まれたとき、「どうだ、これで誰にも文句は言わせないぞ！」という意味をこめて、Ayoku(→I can't say anything)という名前をつけたそう。

スーダン難民で、ここウガンダで新たに生まれた子供達の名前はさらに特徴的である。5,6 人兄弟が当たり前ほど子沢山なせいも、教育の欠如なのか、あるいは彼らの文化なのか、彼らの名前にはどうもこだわりのようなものは見られない。難民の登録をしている UNHCR の職員の話によると、ウガンダで国勢調査(Census)が行われた年に生まれた子供の大多数は Census と名づけられたらしい。また彼らはクリスチャンでなくてもクリスチャンネームを使っていたり、クリスチャンネームとムスリム名がまざっていたりとなかなか複雑、混沌としている。

普段何気なく使っている人名ではあるが、こうして見てみるとその文化の特徴がみえたり、ちょっとした発見があったりしてなかなか面白いものである。

言葉のるつぼ

こちらで生活をしていて、自分にとって日本で生活しているのとの一番大きな違いはなんと言っても「言葉」の違いである。当然ではあるが、周りには日本人はまったくいないため、普段から英語で意思疎通を図らなければならぬ。

実はこの「英語」がなかなかの曲者。こちらにくるまで、「ウガンダやケニアの人は、旧宗主国イギリス譲りのきれいな Queens English を話す」と聞いていたので、言葉に関してはわりと安心していただけだったが、実際は、かなり彼ら独特の「アフリカ訛り」の英語を話していることを知った。考えてみれば当たり前で、同じ英語を母語とするといってもイギリスやアメリカ、シンガポール

やオーストラリアでは、アクセントや表現にはかなりの差があり、それぞれ自分たちの言葉をつくりあげているように、アフリカの人たちも、「自分たちの英語」をつくりあげているに過ぎないのだが、それにしても、最初は聞き取り、きちんと理解するには一苦労、違和感を感じる表現の連続であった。

とくに耳につく特徴を挙げてみると、

例えば、首都カンパラのマケレレ大学の男子学生は、女の子のことを Chick と呼ぶ。確かにアメリカ英語なんかでは、男どうして話しているときに、「例の女の子は最近どうよ？」などと俗な会話をするときには、" How's that chick you were after?" などといったりはするが、彼らはあまりにも日常的にチック、チックと連発するので、他の AIESEC 研修生の間では、Chick はすっかり流行語というか、ネタと化していて、ふざけて"Hey Chick" などとお互いに呼び合ったりしていた。

日本語に方言があるように、こちらの英語にも地域差があり、ここ Moyo では、Chick という言葉はとんと耳にしないのだが、かわりに耳にするのが、"isn't it?" 。It's nine o'clock, isn't it?" などのように動詞を否定して、「～ですよ？」などと相手に確認を促すときに使う表現で、" You are not hungry, are you?" などのように、動詞に応じて、付加疑問の部分の形態も変えるのが文法的には正確なはずなのだが、こちらの方は、動詞の種類にかかわらず、すべて"isn't it?" で片付けてしまう。例えば、" You can understand English, can't you?" とするところを、" You can understand, isn't it?" と言うといった具合で、聞いていてなんともいえない違和感を感じていた。

また発音のささいな違いと言う意味では、こちらでは"C"を「チュ」と、「R」を「アール」ではなく「アラ」と発音するために、December は「でいちえんば」に、UNCHR は「ゆーえぬえいちしーあら」になる。

こういった違い、初めは、個人的な癖や勘違いなのかと思っていたが、時がたち、色んな人と話すにつれて、皆が同じように"isn't"を使い、でいちえんばと発音することを知らにいたって、「これはきっと学校でこうやって習ってるんだな」と納得するようになった。

さてさて、言葉のるつぼというタイトルにしておきながら、ここまで英語のことしか話していないが、本題はここから！

人種のるつぼという言葉があり、アメリカやイギリスのロンドン、オランダの阿姆斯特ダムのように異なる人種が渾然一体と暮らしている様をあらわす表現である。この表現を借りるなら、ウガンダはまさに「言葉のるつぼ」であると言える。

地理的に、内陸国であり、スーダン、コンゴ、タンザニア、ケニア、ルワンダと5カ国に囲まれるウガンダは、特に国境付近では隣接国の部族語の影響に常にさらされており、部族によっては国境をまたがって両側に散在していることもしばしばである。

公用語こそ英語となっているが、50 余りある District のほとんどは別々の部族からなっており、それぞれの部族は異なる言葉話すため、地域レベルではその部族語も公用語となっているらしい。(学校教育は最初の3年間で部族語を教科として習う他は、授業は完全に英語でなされるが、学校の外では部族語を話すのが一般的となっている。)

このような状況のため、島国として孤立した日本とは大きく異なり、様々な言語がお互いに影響しあい、時には衝突もしながら、ひとところに渾然一体となって存在している。

Moyo では隣接する Arua や Yambio から来た Lugbara 族のほかにスーダンからの難民である Kuku や Dinka などまったくことなる言葉話す人々が多く居住している。町で暮らす人々は必要性から大抵 Moyo の現地語である Madi を覚えるのだが、村に行くと Madi を話せない外来者は多い。スーダンではつい最近まで英語教育は行われていず、公用語はアラビア語であった為に、彼らと話すときはアラビア語を使う必要がある。また学校に通うことが出来ず、英語ははなせないという人の割合は Madi 族でも町から離れるにつれて顕著であるが、そういった人もどこで覚えたのか東アフリカの共通語であるスワヒリ語の素養はあったりする。英語教育が普及する前に教育を受けた人々は、スワヒリ語が英語のように世界共通語だと思っていて、僕を見つけるとスワヒリで話しかけてくることもしばしばである。

このように異なる言語との接触の機会が多いためか、あるいは言語習得への適性がもともと高いのか、こちらの人は言葉に非常に堪能であり、教育の程度に関わらず、4、5 種類の言葉は当たり前話せたりする。ADEO の守衛をしている 22 歳の青年 Akim は財政難から小学校を中退して、さまざまな NGO を転々としながら守衛や給仕として働きなんとか食い扶持を稼いでいるというが、英語はもちろん、Moyo の部族語である Madi に加えてアラビア語、スワヒリ語も問題なく話せるという。どうやって学んだのかと聞くと、普段生活をしていて、聞きなれない言葉を耳にした時には、その意味を尋ねるようしており、そうやって異なる言葉に興味を持ち、普段から接しているうちに自然と話せるようになったということである。Moyo の Community Based Organisation (CBO) で働くケニア人の友人曰く 3 ヶ月も現地で生活すれば仕事に困らない程度には現地語を話せるようになるというのだから、まったく驚きである。(僕は、今だに Madi では挨拶と「どこいくの?」「お腹すいた」などのごく簡単なフレーズしか言えません・・・)

また、それぞれの言葉が互いに結構影響を与えていて、Moyo の人が Madi で話していても、英語の単語や表現がちらほらとのぞくのはごくごく当たり前であり、本人も英語が混ざっていることに気づいていなかったりする。自分たちの言葉にない表現は外来語から補っており、Madi の人がよく「ようこそ！」というときに使う"Karibu"は実はスワヒリ語の表現であることを知った。感謝の意を表すときに Madi では"Manzora"というが、人によってはスワヒリ語で"Asante sana"といたり、アラビア語の"Shukran"を使ったりもする。日本語でありがとうというかわりにくだけてサンキュというような感覚であろうか。

普段からこのような多様性に触れている彼らはある意味で非常に恵まれているということができるのではなかろうか？日本人が国際社会でのプレゼンスをいまひとつ発揮できていないのは、言葉の壁が大きいといわれているが、その壁も普段、日本語以外の言葉とはなかなか接することが出来ない島国日本＋(ほぼ)単一民族国家日本という状況によるところがかなり大きいのではないかと感じた。

「言葉のるつぼ」の中で暮らしていることによって得られる、未知の言葉への適性や異なる言語文化との協調の経験を生かして、様々なリソースへの適切なアクセスが出来れば、あるいは新しい職の開拓や生活の向上につながるのではないかと漠然と考えている今日この頃。

(もちろんこれらの多様性がゆえに一部の地域で紛争が絶えないということも言えるのだろうけど・・・)

What's up in Palorinya!! -----

今回のトピックは、

1. SNIDS(スニッズ)
2. サッカーイベントの集客力

の二つ。

1. SNIDS



SNIDSとは Sub National Immunization Days の略であり、ウガンダ政府が国を挙げて取り組んでいる、予防接種率拡大の為の一大イベントである。破傷風やポリオの予防接種が主に乳幼児と妊婦を対象に無料で施され、Vitamin A などのサプリメントも補足的に提供される。これだけの予防接種を全国規模でやるとなると、ワクチンやサプリメントの調達にかかる

資金は莫大なものになるが、そのほとんどは、ドナーからの援助によってまかなわれており、その顔ぶれは層々たるもので、UNICEF、DFID、USAID などの国際機関、政府系開発機関が名を連ねている。

今回の SNIDs は 2005 年第二ラウンドで、その開始日にあわせて、大手新聞には第一ラウンドの結果がでかでかと載っていた。それによると Moyo District のパフォーマンスは極端に低く、他のほとんどの地域が予防接種目標人数の 100% を達成しているところ、半分の 50% 程度しか達成できていないということであった。ADEO や地方政府の保健医療関係の責任者の話によると、これは Moyo の人口統計が、地域に住む子供の人数を過大評価しているためである、ということらしいが、なににせよ今回のイベントは汚名挽回とばかりに気合を入れて臨んでいるのが傍目からもうかがえた。

こうしたキャンペーンはとにかくマンパワーと根気、十分なモチベーションを必要とする。ADEO はとくに難民の多く住む地域を担当し、それぞれの難民セトルメントに一つずつ、計 30 余りの集合所を設けて、各集合所に医療スタッフを 3 人ずつ置くことになった。これだけでも 90 人のスタッフを使っており、さらに人を集める Mobilization 役としてそれぞれのポストに二人ずつの人が配置された。彼らは朝早くから夕方まで、ひたすら予防接種を続け、人が集まらない場合は、戸別に訪問をして、とにかく予防接種を受け損ねる人が出ないように最善の努力をしていた。もちろん仕事に対する姿勢は人によって差があり、中には人が集まらないときは何もせずにのんびりとしている人もいたが、すべてのポストをモニタリングしてまわった感想としては、スタッフは概して真剣に取り組んでいると感じた。これも、予防接種の可否は、彼らの命に直接関わってくる非常に重要な要素であるということを感じて痛いほど認識しているからであろう。特に未だにはだして歩く人が多い Moyo では人々は常に破傷風にかかる危険性と隣り合わせであり、スタッフは破傷風の予防接種率向上には格別の重点を置いているということであった。

開発というと国策としてのインフラの整備や経済発展、国連の援助などどちらかというとマクロな援助に視点がいきがちになるが、実際に活動を行っているのは多くの場合地元の NGO や CBO であり、こうした NGO・CBO や地方政府による草の根、ミクロな援助活動なしには開発は存在しえないことを再認識させられるキャンペーンであった。

2. サッカーイベントの集客力

ウガンダ、特に地方に住む人々にとって最大の娯楽の一つはサッカー観戦である。村のサッカーフィールドで試合が行われるときは必ず人だかりができ、学校対抗のサッカートーナメントが開かれる時は仕事をさぼって 10 キ

口の道のりを歩いて観戦に来る人もいる。また旧英植民地であった影響か、イギリスの Premium League の人気はすごいもので、Man-U や Arsenal、Chelsy の試合があるときは、村に限られた数しかないテレビに大量の人があつまり、文字通りテレビにかじりついている。ADEO の Compound にもテレビがあるため、Premium League のメジャーな試合がある日は、気づくと知らない顔がテレビの前にたくさんならんでいたりする。

さて、こんなサッカー人気を上手く利用して、ADEO が Reproductive Health の分野で行っている活動の一つである VCT(注を参照)と結び付けようとしたのが今回のイベント VCT sight promotion サッカーイベント編である。単に VCT をやると宣伝してまわっただけでは、遠くからはるばる尋ねてくる人の数は少ないが、このようなイベントと結びつけると、集まってくる人の数は格段に増えるため、VCT はサッカーに限らず、歌やダンスなどのエンターテインメントと結びつけて行われるのが一般的な戦略となっている。

まず初めにしたのが、サッカーイベントに参加してくれるチームの特定。District をまわり、それぞれの村のトレーディングセンター(村には、それぞれ、市場[いちば]とよろずやが集まる区画があり、食糧や日用雑貨など普段の生活に必要なものは、ここで調達することになるため、大抵、いつも人が集まって、村の中では比較的にぎわっている一画である)で聞き込みを行い、日ごろから比較的、練習をこなしているチームを二つ特定した。サッカー場の手配は、一方のチームが普段練習場としているところを借りることにし、チームメンバーにイベントの趣旨を説明した。参加者には、昼食が振舞われる上、勝者には「豪華な賞品」もあるとあって、両チームともメンバーは大いに乗り気であった。

興味深かったのは、勝者に贈られるこの「豪華な賞品」の中身。日本ならトロフィーや賞状に加えて、ちょっとした副賞が贈られるのが一般的だろうが、こっちは大胆に「ヤギをまるごと一頭」振舞うことに決まった。勝利チームは、試合後、ヤギを炭火で焼いて勝利の美酒を味わうことが出来るという粋な振る舞いである。商品のヤギは、村で顔の聞く仲介人に交渉をしてもらい、粘りに粘って、23,000 ウガンダシリング(=1400 円)でゲットし、試合後に生きたままで勝者に手渡された。(交渉の現場、勝利チームのスナップはフォトアルバムにアップしてあります。)

チーム特定と、会場確保の後は、肝心の Mobilization ! こっちにきて、会議やプロジェクト、イベントの開催のたびに、関係する人員をあつめる Mobilization の難しさ、手間を痛感してきた。日本なら、Mobilization は郵便やインターネット、携帯での連絡を通じて用意に片付けることが出来るが、こちらでは、事務所や商店が郵便局に私書箱を持つ以外、個別の住居に郵便物を届けるということはない為、郵便を有効に利用することは難しく、携帯やインターネットも十分には普及していない。そこで、Mobilization は、多くの人手を使い、実際に宣伝・連絡してまわるしか

い。今回は、すこしでも Mobilization を簡単にするために、宣伝ビラをデザインして、村のトレーディングセンターや、大通り沿いに聳え立つ大木などなるべく人目につく場所に貼り付けてまわることにした。

まるまる二日がかりの Mobilization の甲斐もあり、当日は、ぐずつく雨にもかかわらず、朝早くから大勢の人が集まり、サッカーの試合が始まる時間にはその数は 300 人以上にもものぼった。

今回のイベントは、PSI という、国際 NGO からのファンドによって行われたもので、今のところ定期的に行われるという種類のものではないが、こういったコミュニティを広く巻き込んだイベントは、一般に考えられている以上に、地方コミュニティにおいては影響力が大きいことを実感した。これから、なんらかのファンドを惹き付けて、同様のイベントをいかに継続的にもたらすことができるか、その戦略を練るのが、ADEO の課題の一つであるといえる。

(注)VCTとは Voluntary Counselling and Testing の略で、HIV/AIDS 対策の一つの中核をなしているものである。HIV の感染拡大防止のためには、自分の HIV ステータスをきちんと認識し、また HIV/AIDS に対する正しい知識を持つことが大前提であり、VCT は検査前後のカウンセリングと HIV 検査により、この両方を提供する。特に陽性と判定された人に対しては、HIV とどのように向き合っていけばよいか、抗エイズ薬の利用も含めて、念入りなカウンセリングが行われている。

とある日の夕暮れ時に -----

いよいよ研修も残り一ヶ月をきり、資料やレポートなどの編集作業で事務所にこもることが多くなってきた。最近では、仕事に疲れたときは事務所から出て、緑に包まれた新鮮な空気を吸うために少し散歩に出ることにしている。

ADEO の敷地をでると幅 10 メートルほどの一本道があり、右に曲がると Moyo の町へ、左にまがるとナイル川へと続いている。5 月のとある一日、ADEO のオフィスから一番近くにあるトレーディングセンターまでぶらっと散歩をしようと、ADEO 敷地を出て、ナイル川へと向う緩やかな坂を下り始めた。雨上がりの夕方、空気はひんやりとしており、散歩にはもってこいの気候である。

歩いていると、頭に薪の束やポリタンクいっぱいの水をのせて歩いている女性と頻りにすれ違う。首と肩の動きで上手くバランスをとって手で支えることなく 10 キロ以上もの荷物を頭で支えて運んでいるのだ。彼女らの多くは

スーダン難民であり、英語は話せないが、軽く笑顔を作り、手を振ると、その何倍もの満面の笑顔を浮かべて手を振りかえしてくれる。ちょうど学校が終わって帰宅する時間だったため、子供達もグループをつくり、各々の家へと向ってあるいており、僕を見つけると「もーんろっ(白人)!!」と呼びかけてくる。返事をするときゃっきゃと飛び上がって喜び、友達同士でひそひそと内緒話をはじめる。「ねー、みたみた??本物のはくじんがこっちに手を振ったよお。」とでもささやきあっているのだろうか。最初は戸惑うことも多かった彼らの視線も、いまではすっかり慣れて余裕を持って応じることが出来るようになった。

木々にはココナッツやマンゴーが実り、畑にはモロコシが植えられ、まもなく訪れる収穫のときを待っている。30分ほどのんびりと歩き、坂を下りきってつきあたりのラウンダバウトで右折すると、まもなくNdilindili トレーディングセンターに到着する。ついた頃にはすでに日も暮れて、店先にはランタンのやわらかい灯りがともし始めていた。

センターといっても、レンガ造りにトタン屋根の万屋や食堂が道を挟んで両側に5件ほど並び、ごく小さい盛り場であり、それでも、村では一番の「都会」であるため、多くの人が集まっている。食堂は、日本の時代劇のテレビドラマに出てくる山間[やまあい]の休憩所のように、外に木製の長いすと長テーブルがだされてあり、人々は肩を寄せ合うようにして食事をとっている。暗がりの中、道にあいた穴に足をとられないよう、足元に注意しながら歩いていると、後ろで僕の名前を呼ぶ声がする。振り返ってみてみると、Ndilindili センターの裏手に居を構える顔見知り食堂の長いすに腰掛け、アフタヌーンティーをすすっていた。一緒にお茶をしないかとの申し出に答えて、自分も長いすに腰掛ける。こちらに来た当初は日が暮れてから活動するマリア蚊に注意していた為、暗くなってからセンターに来るのはこれがはじめてであったが、オレンジ色のやわらかい灯がスポットライトのように人々の活動を照らし出すせいか、昼間以上に活気に満ちて見えた。

店先のランタンや食堂の竈の炭火はこうこうと燃え、子供達は、薪やわらに火をつけて灯籠がわりにし、元気に走り回っている。すこし危なっかしくもあるが、火傷をしないように、それこそ線香花火でも扱うように、上手に火を扱い遊びまわる姿にしばし見惚れていた。空を見上げれば満天の星空に絵に描いたような天の川が広がり、星のまぶしいばかりのきらめきに混じって、ホタルのやんわりとした光りがところどころにちらついている。耳を澄ませば、人々がさわさわと話す声にまぎれて、蝉の鳴き声が聞こえる。初めてのはずなのに、どこか郷愁を感じてしまう、そんな情景である。日本においてはごく一部の地域を除いてすでに失われてしまった情景・・・

やがで、Moyo にも開発の手が及び、道路が整備され、畑は住宅地へとかわり、これらの自然に満ちた生き生きとした情景も失われてしまうのだろうか? Moyo に住む人々は、自然と共に暮らす生活よりもラジオやパソコ

